

令和6年第2回千葉県文化芸術推進懇談会 開催結果

1 日 時 令和6年10月8日（火）午後2時から3時45分まで

2 場 所 ホテルプラザ菜の花 4階「楨」

3 出席委員（委員総数11名中11名出席）（座長、副座長以下50音順）
草加委員（座長）、石橋委員（副座長）、植田委員、垣内委員、菊池委員、河野委員、こまちだ委員、佐々木委員、椎名（喜）委員、椎名（誠）委員、西委員

4 会議次第

1 開 会

2 挨 拶

3 議 事

（1）「文化芸術への意識に関するアンケート調査」の結果について（報告）

（2）「千葉県文化芸術推進基本計画」令和5年度の進捗状況について（報告）

5 議事概要

（1）「文化芸術への意識に関するアンケート調査」の結果について

資料1により事務局から説明し、その後各委員により意見交換を行った。

<意見交換概要>

【委員】

障害がある方の文化芸術活動というところで、鑑賞、参加できる機会が十分にあるかと思うかに対し、「わからない」という回答が多かったということが気になった。

うみのもり（千葉県障害者芸術文化活動支援センター）では、活動に関するチラシ等を福祉事業所と文化施設を中心に毎回2,600通送付（情報発信）しており、これは他県と比べても多い数字である。この「わからない」と答えたのが、果たしてどなたが答えたのか。家族なのか、それとも福祉事業所なのか、支援の立場の方なのか。そういう意味では、どこから発信していくことが効果的なのか検討の余地がある。

障害のある方の家族等、なかなか文化というところまで発想がいかないという可能性もあると考えられるが、うみのもりからだけでなく、文化施設からも障害のある方も受け入れているということもお伝えしていただきたいと思うし、今後は発信の出所を考えなければいけないのかなと思った。

あとは、県が積極的に取り組むべき分野について、「子どもたちが文化芸術に親しむ機会の充実」の回答が多かったというところ、県民からの要望があるというのは大きい力だと思った。やはり文化芸術の大切さを伝えるのは子供の時から。

【事務局】

本アンケートは無作為に選ばれた県民 3,000 人にお送りし、無記名で御回答いただいている。回答者の年代や性別は全体の統計を出せるが、委員が求めるレベルの詳細は出すことができない。

【座長】

統計的には信頼に足る数値かもしれないが、分母(回答者)が 1,206 人になっていることを考えると、回答者全員が、障害がある方に対して文化芸術がどうあるべきかということが理解いただけていないのかもしれない。

【委員】

資料 1-2 の⑩「県が積極的に取り組む分野」、もしくは資料の 1-1 の冒頭で、「子ども・若者が文化芸術に触れる機会の充実」を積極的にやっていく必要があるとのことだった。機会の充実というところで、ある程度の年齢になって文化芸術に触れるというよりは、早い段階で身近に文化芸術に触れる機会があるというのは非常に大切なのではと感じている。

千葉市文化振興財団の方でも、子供が早い段階で文化芸術に触れるというところで、こみゅぷろ(こどもミュージックプロムナード)という事業があり、年に 12 回程度、公募で希望のあった幼稚園や保育園等に積極的に出向き、参加型で文化芸術に触れる機会を提供する事業を行っており、非常に好評を得ている。そういった地道な取り組みが必要なのかなと考えている。

【委員】

地域の伝統芸能が「あるかどうか知らない」という回答が 4 割を超えるというのが結構ショックだったが、サンプルで抽出したところの皆さんの地域性のようなものがあるのかなとは思った。あと、やはりどんな地域にも、小さなお祭りから様々な伝統芸能のようなものがあるので、「伝統芸能」という意識が無く参加している場合が多々あると思う。なので、それが伝統だよということ、小さい子供の時からわかるような機会があるといいと思う。

佐原にはお祭りや伝統文化に結びつくものがたくさんあり、小さい時からそういう場に参加するという感じがあるので、他の地域においても、自分の地域にもそういう伝統があるということを知ってもらえるような取組が必要なのかなと思った。

【座長】

伝統芸能に含まれる活動の範囲が広いため、そこを十分に御理解いただく必要があるのかもしれない。いわゆる生活文化や、お祭りみたいなものも入っている。

【委員】

食文化もあるので、もっともっと幅広く、文化に関わっている部分が多いと思う。

【座長】

お茶やお花、書道等も生活文化であるので、それが地域にないということは考えにくい。

【委員】

全国の方々が何某かの文化に関わっていると思うが、無意識のうちに関わっているため気付かないという部分があると思う。それに気付くことができるような仕掛けがあると良いのかもしれない。

【座長】

参加に関する意向として、アンケートの結果を見ると、「今後も続けたい」という人と、「今後参加してみたい」人たちを合わせると3割ぐらいはいる。逆に言うと、「今後は続けたいとは思わない」という人が5.7パーセントいるので、それをなんとか防がなければいけないのかもしれないが、積極的な行動意識を持つ県民が3割いるのは希望と見るのか、少ないと解釈するのか判断が難しいが、少なくとも関心を持っている人が3割程度いるということだとは読めるかもしれない。

【委員】

資料1-1の一番下に、県が積極的に取り組む分野は「子どもたちが文化芸術に親しむ機会の充実」が最も多く挙げられたとある。この会議でいつも申していることであるが、ぜひ小さい頃から文化芸術に親しむ機会を作っていただくこと、これが1番だと思う。それが文化芸術かどうか意識しているのかというところもあると思うが、ぜひ子供たちや、若い頃からそういう機会を作っていただければ本当に嬉しい。

一方で、地域の伝統文化において参加していないし、今後参加したいとも思わない人は63.1パーセントという結果があった。今、委員からもお話があったが、おそらくお祭りとか文化、伝統芸能という意識の問題もあると思うが、ひょっとするとこれは地域の問題であり、例えば「町内会に参加しない」というようなことも、こういうところに出てきているのかなと思う。お祭り等はある意味で地域のコミュニティだと思っていて、昔からその地域にいた人は続けているが、新しく来られた方は、昔からの人のものなんだと離れていってしまうこともあるのではないか。全てがそうでないとは思いますが。

伝統芸能やそういうお祭りなどは地域のコミュニティを作るものだと思うので、ぜひ誰もが参加できる仕組みがあったらいいなと思う。

【座長】

地域コミュニティと関係している部分も多いのかもしれない。それが生きづらさととらえるか、自分たちの生活を豊かにしていると思うかという差があるのかもしれない。

【委員】

アンケートを拝見して、文化芸術を「鑑賞した」という方はどんな形であれ一定数いて、ただし参加するという話になるとまた別の話になる。ここの大きな差を聞いてみたときにやはり基本的には受け身なんだなというところが、自分の直感も含めアンケートを見て改めて感じたところ。

子供に対しては、回答者御本人も芸術の送り手の皆さんも何かしら還元したいという気持ちで、そこは双方合っているところもあるが、改めて拝見すると、やはり受け身になってしまうところに「来てください」と言うだけではなかなかリーチしないというのを感じる。我々も事業をやっていく上で、そこはすごく悩ましいところである。

子供が未来をつくっていく、そこがキーポイントであるということで、ターゲットをしっかりと定めて出向いていくこと。先ほども御意見があったが、いかにその場を用意するか、出向いていくか。「ここに特に絞っていく」というところが、何か変化を起こす意味では重要なのではないかなと感じた。

また、今、委員がおっしゃったコミュニティについて。私自身も地域の活動に行くかという、なかなか行かず、子供に対してもあまり積極的に勧めていない。小さい頃は、集まりに行けばお菓子もあるからとか、何も言わずにどんどん飛び込んでいったものであるが、時代というか、そこの根っこがない中で子供たちを巻き込んでいくというのもこれまた難しい話だなと。

コミュニティという切り方でも、子供をいかに引き込んでいくか、これが非常に重要なんだなと感じた。

【副座長】

県が積極的に取り組む分野として、「子どもたちが文化芸術に親しむ機会の充実」が挙げられている。これは常に上位にある課題だと考えている。当財団の事例報告という形になるが、私どもの事業では通常 5,000 円相当の公演を小中高校生は 500 円で鑑賞することができる。この取組の効果として、親が子供を連れてくる機会が非常に増えてきているので、こういった取組を主催団体に P R して積極的に取り入れていくことで、先に述べた課題の解決につながるのではないかと考えている。

加えて、子供たちの鑑賞機会を増やすために、都内で開催される公演と比較して良心的な価格設定、そして“0 歳から入れる”という取組を行っている。これまで、0 歳の子供が入場することに対して、観客からの苦情はない。こういった取組を行うことで子供たちが入りやすくなる、鑑賞しやすくなるということに関係団体に広めていくことが重要であると感じている。

【座長】

千葉県文化会館が開館から 50 年近くあっても 56 パーセントというのをどう捉えるかというところもある。また、千葉県文化会館だけ認知度が元年度のデータより 9 ポイントぐらい下がってしまっているところが少し疑問に思う。認知度であるので、他のところはそう大きく動いていないが、ここだけ少し落ちているのが気にはなる。

私どももこういう調査を色々なところでやったことがあるが、定住率が高い地域だと認知度が高い傾向になる。流出人口が多い都市部だとどうしても落ちてくるのは致し方ないのだが。そういう意味では、県立美術館も頑張らなきゃいけないなという気もする。また、どれぐらいの県民が行ったことがあるかというのも施設にとっては重要だと思う。この利用経験というのは新たに加えられた指標であるが、認知度だけではなくて、行ったことがあるかどうかが増えていくのも重要なことではないか。

【委員】

結果を聞いていて、例えばこの 1 ページ目の最初の項目、結局は鑑賞する人の割合が向上したという理解で良いのか。この結果とリンクするような内容や質問項目があると、今後の対策は何かというデータになると思うので、御検討いただきたい。

片や、先ほど話題になっていたが、自分は知っているが参加したくない、だけど子供には参加させたいという、ある種の矛盾とも取れるような結果もあった。個別の回答を追いかけていくのか、他の設問との対照等で解析することができるかわからないが、どういう特性を持った人達が好んで参加し、子供にも参加させたいのかというところの解析ができると良いのではないかな。そういう人たちの特性には今後の展開のヒントがあるのではないかなと思った。折角アンケートがあるのだから、更に役立てていただくと良いと思う。

それから、「参加する」というのも、先ほど委員がおっしゃっていたが、主体的に参加する人と、主体的ではなく参加する人がいると思う。このアンケートからは推し量れないところではあるが、ぜひ主体的に参加するという、次の世代への受け渡し方というところも、数字上では出てこないところかもしれないが、考えていくべきではないかなと思った。

【委員】

3 点ほどコメントしたい。その前に、文化芸術を鑑賞したという方が 89 パーセント。これは、テレビやスマートフォンなども含む鑑賞という質問に対して、10 人に 1 人が鑑賞していないという回答だったということである。例えばテレビで大河ドラマを見ることもなく、ゲームをスマートフォンでやったことがないということであり、衝撃を受けた。

その上で、こういう調査をやる時は、何のために調査をやるのかということが要点だと思っている。何が障害になってアクセスができていないのかを明らかにすること、

それと合わせて県にどういうことを期待しているのかを明確にしたいということ。回答母数が 1,200 あるのでクロス集計は多少できると思う。統計上の有意差まで見られるかどうかは個別案件になるかと思うが、いくつかはクロスを取れるんじゃないかと思う。その時に、お住まいの地域、それから年代、加えて所得あたりも取りたいところだが、それは調査項目に含まれてないと思うので、どこにお住まいで、年代がどの辺りか、つまり勤労世帯なのか、もう引退した世帯なのかといったようなことは多分ざっくりと分けて検討できると思う。もう少し踏み込んだ分析もぜひやっていただきたい。特に、働いている世代というのは、やはり時間がない、仕事も家庭も大忙しな年代だと思うので、こういう方々がなかなか参加できないというのはもう一般的な動きであるので、その中で何を考えているのか、何を期待しているのかというところをぜひ分析で明らかにし対応を検討していただければなというのが 1 点目。

2 点目は、電子機器で自宅や通勤通学、移動中でコンテンツを見ているというところに対しては、県としてはあまり手を入れることができない部分があって、そこは自由にやっていただいた方がいいのかなというところかと思うが、それ以外の、例えば県内・県外等の施設で見たという方々に対しては、きちんとした手当てをしていく必要性もあるだろう。この部分を分けてクロス分析をしてみて、どういう傾向の違いがあるのか。特にライブで見ている方々というのは、どんな人たちで、何を求めているのか、どんな傾向があるのかといったようなことを調べていただければなと思う。というのも、文化施設、特に劇場、ミュージアムもそうかもしれないが、劇場は特定の時間、特定の場所にいないと舞台を見ることができない。そのため、どうしても地域差があると思う。例えば南総文化ホールに、県北西部の辺りから行くというのも現実的にはなかなか難しいところなので、認知度や利用経験は地域によって相当違うと思う。また、伝統芸能も同じように相当な違いがあるのではないか。千葉県の場合、3 つの地域が集まって県ができたと聞いており、それぞれの地域性の違いもあるように思う。一方、県は地域全域を全部カバーしなければいけないため、少し分析の解像度を高めていただいたらいいかなというのが 2 点目。

3 点目は県が積極的に取り組むべき分野についての回答、これはとても大事なデータだと思うが、複数回答で取っているので、子供たちが親しむ機会の充実を選択した方々と、それを選択しなかった方々には、例えばホールの充実とか、芸術家への支援とか、そういったような項目の比率も違ってくる可能性があるのではないか。可能であれば、その差を見てもいいのかなと思う。色々なセグメントがそれぞれ異なる期待を持っているかもしれないので、よりきめ細かな手が打てるのではないかと思う。

【座長】

文化を鑑賞しない阻害要因を見つけることは、アンケートのようなものでは難しいかもしれない。また、委員も含めて何か方法があれば教示いただきたい。回答者はどうしても時間がないとか関心がないという選択肢に丸をしがちだが、具体的な理由がない理由として選択しがちになることが伺える。情報がないと言われると、どこまでどう

やって情報を出すのかということも難しい課題である。ホームページも、訪れてくれないと情報が伝わらないツールなので、そこにどうやって関心を持っていただくのかは難しい。その辺の阻害要因をどう見つけるかということも重要な視点ではあると思うので、ぜひお知恵を借りたい。

【委員】

私は民俗が専門なので、そちらの視点から感想を述べる。1番大事だと思うのは、やはり今の地域社会、コミュニティの形成が人が動かないことを前提としている。定着している人たちが多数いる中で作られた組織であり、それに対して動く人たちを中心として社会が成立していくと、情報と情報をどうやって伝えられるのかということも大事な要素として出てくると思う。

情報の共有化をどう図るのかというのは非常に大事なことで、アンケートの結果にもあったが、子供の時から参加して年齢を積み重ねるにしたがって組織の中の位置付けが変わってくるということ。子供の時からいる人を対象にするというのが前提になってしまう。その人たちが閉鎖社会の中でどう情報共有していけるのかというのが非常に気になるところ。

実は今から20年くらい前に、祭りの情報を共有できないかということで試してみたが、結果として失敗した。失敗した点として、誰が情報の管理をするんだ、というのが1つあった。毎年祭りの日程が変わっていくことが多いが、そういうことも飲み込んでこなしていくことができないということ。もう1つは、当事者だけの問題ではなく、当事者を取り巻く人々との関係がある。例えば、子供の行事に泥水に浸かって行う行事があると、母親たちから汚いからやらせたくないという意見が出てくる。そういうことを考えると、当事者本人だけではなくて、その周りを取り巻く人たちの認識を変えていかなければならないということが1つあるかと思う。

余談であるが、ある地区の祭りで、新しくマンションの建築工事が始まった時に、マンションの住民たちにあらかじめ祭の会所としてマンションの2部屋を祭りで使うという了解を取っておいたという例もある。やり方次第では可能なのだろうが、なかなか認識を改めていただくこと、あるいは我々が期待するような方向での認識を生かしていくというのは、一朝一夕ではできない話なのかもしれない。

【委員】

子供たちの部活動について少しお話させていただきたい。資料1-2の⑩「県が積極的に取り組むべき分野」で、46.4パーセントの方が子供が文化芸術に親しむ機会の充実が必要だ、と言っている。今、高文連（高等学校の文化系の部活動により構成される組織）には約2万人の生徒が参加している。高等学校は公立、私立合わせて全体で14万人の生徒がいる中で2万人ということで、13、14パーセントぐらいになる。この2万人の子供たちは、充実した文化芸術活動に主体的に取り組んでくれていると思う。この子供たちがこのまま大人になってくれば、相当数が文化芸術活動に取り組むと思う。

しかし、現在は、教員の働き方改革というところで、部活動のガイドラインにより平日は4日、それから土日はどちらか休むという形で進められている。

部活動の地域移行については、令和8年から全ての中学校で土日の部活動を全部地域移行にしようとしている。子供たちが主体的に文化芸術に親しむ機会を残してほしいという県民の思いもあるので、地域移行が適切に行われて、子供たちの文化芸術活動に参加する機会が少なくならないように、ぜひ県の方でも御支援いただきたい。具体的には、部活動の地域移行の受け皿となるような団体がうまく見つかるように御支援いただきたい。

【座長】

それに近いかもしれないが、資料1-2の⑤「文化芸術活動を行う際の課題」に、練習・制作の場所がない、それから発表の場が少ないというようなことも書かれていることと、加えて高校生の活動は学校内が主体だとは思いますが、外にどう発信できるのかというのを考えていかなければいけないと思う。ぜひ、具体的にどういう支援があると高校生がさらに活発な活動ができるのかというのを教えていただいたりすると、県も支援の方法が考えられるかもしれないのでお願いしたい。

1つだけ、先ほど委員のどなたかコメントしていただいた自宅通勤、通学の際に携帯とかで見る、いわゆる「ながら視聴」というのが今すごく多くなっている。ただ、多くの場合は1.5倍速度など速度を上げて見ているケースが多いので、これを視聴と呼ぶかどうかというのは、確かに委員がおっしゃるように課題である。ライブとは区別をしていかなければいけないのかもしれない。

それは子供だけの問題ではなくて、大人もそうしているというのを聞くことがある。アクセシビリティとしては決して悪いことではないが、それが常態化するのはなかなか歓迎しにくいように考える。そんなことも今後どう評価するのかを考えていただければ。

(2)「千葉県文化芸術推進基本計画」令和5年度の進捗状況について

資料2により事務局から説明し、その後各委員により意見交換を行った。

<意見交換概要>

【委員】

施策の柱4「次代を担う子どもや若者がちばの文化芸術に触れる機会づくり」で色々なイベント等を実施していただいてありがたいなと思っているが、ロックインジャパンフェスティバル関連事業、ROAD TO JAPAN JAM、これは引き続き実施できるのか。

【事務局】

今のところ、実施する予定。

【委員】

軽音楽に取り組む子供たちが多いので、ぜひ、引き続き実施していただきたい。

【委員】

祭りをはじめとした伝統文化について、担い手が不足しているというのが現状である。担い手をどう守っていくのかが非常に大きな課題になるだろうと思っている。

自分が学んだ事例として1つ、これは中山間地域に限定できる話だと思っていたが、そうではなく、都市の中心部でも共通するのではないかと思うものがある。千葉県内という佐原の大祭があげられるが、祭りの中心が、祭りを執行する町の中心部の人たちだけではなくて、その周辺の農村部の人たちも参加をしている、祭りへの参加が前提になって組織ができていくんだというもの。祭りの担い手が不足している中で、祭りを上手く執行できるシステムとして、町と周辺の農村との協業体制が成立しているということが大切。

そういった意味で、祭りを支え保護し守っていくというのは、人を守ることにつながっていくのではないのかと思っている。これは大都市でも同様である。例えば、京都祇園祭の山鉾の曳き手はボランティアに頼っている。そういう意味で、人をどう確保していくのかが大きな課題になってくるのだろうと思っている。

【座長】

これもコミュニティということに起因する課題なのかもしれないが、取組を続けていくことも重要だということだと思う。

【委員】

色々な事業に対して指標をあげてフォローされていることはすごく良いと思うが、この目標値の設定はどのように設定したのか。どういう趣旨で設定し、それが今もなお適切と考えているのか。また、基本的に鑑賞割合とか、鑑賞人数が増えているという話だが、実態としては、令和2年のオリパラができなかった年がどん底で、そこから少しずつ戻ってきたということで、家計の消費から見ると、令和5年ぐらいでほぼ戻ってきたという状況。つまり、コロナ禍前はかなりマイナスだったところが、ようやく普通に戻ったという状況なので、増えているといえばそうだが、この後どう展開できるのかというところが1つ大きなポイントになると思う。

各指標の実績の後に色々と課題を明らかにしているが、例えば資料1-3の8ページの子算の確保とか職員やノウハウの不足などは構造的な問題で、急に解決できるものでもないように思われる。予算が倍増すればよいが、人口減少の中で自治体の予算が増えていかない場合、どうするのか、工夫が必要になるかもしれない。また、12ページのところ、色々な既存事業のさらなる推進が掲げられているが、それだけで良いのか、新しく対応が必要となる課題はないのかというところが知りたいところである。

なお、観光等の場合、フェス等も含めた文化芸術はマーケットが重要な役割を担っていて、民間やNPOなど、政府・自治体だけではできない部分があるので、そういったところとのコラボレーションがすごく必要なのではないかと感じた。

【座長】

目標値の設定と結果が大きく乖離しているものもあるので、距離があるかもしれない。人とお金というのには限界があるので、色々な専門家との協働ということでNPO等ともコラボレーションしていくという方法を考えていくことも手段であるという御助言があった。ぜひ考えていただければと思う。

【委員】

いつも同じことを申し上げてしまうが、結果をまとめるとこういう資料の形になるのかもしれないが、この結果の具体的な内容が気になっている。まとめ方として、1つ1つの団体なり、地域なり個人なり色々な分け方があるが、こういった形にすると実は実態というのを必ずしも反映してないのではないかと少し心配している。

結果をまとめた後に、具体の事例等をうまく掬い取って、そこに対する施策を打つというような、まさに具体を対象とした部分をぜひ今後入れていただけるとありがたい。

【座長】

目標は綺麗にできたが、それを実行に移す手段がうまく通り良き管になっていないのではないかと御指摘と受け止めた。それは人材の問題だったり、予算の問題だったり、先ほど御助言いただいたようなこともあるかもしれない。それらが効果的に繋がっていくように組み立てていける方法を考えていただきたいということか。

【副座長】

基本指標の2番目（活動をした割合）について、目標が50パーセントで現在28パーセントということだが、千葉県の文化を振興する立場として、鑑賞以外のものにもより多くの県民に参加してもらいたいと考えている。数字が伸び悩む1つの要因として、コロナの影響を強く受けたことで合唱事業などの大規模なものが減り、少人数で行うものが増えたことが挙げられる。

【座長】

活動するということも、色々な活動の仕方があると思うので、支援をする、情報を提供する、もちろん資金を出してくれるということもあるかもしれない。活動の仕方にも幅があるので、自らが文化芸術活動をやるということだけではないということも含めて、色々な人を巻き込んでいく仕組みを作っていく必要があるだろうと思う。

【委員】

まず全体的に活動を取りまとめられて、KPI を設定されているというところ、定点観測がすごく重要なことだと思っていて、こうやってきちっとされてることは素晴らしいなという風にまず思った。かつ、色々なまとめ方があるのだろうが、実績自体は上昇傾向にあるということも喜ばしいことだと思う。

先ほどの委員とほぼ同じ意見になるが、目標設定、目指すところが果たしてトレンドとして正しいのかどうかというところは一度立ち止まって考えてみてもよろしいかなと。また、余暇の過ごし方を考えた時に、文化芸術やスポーツなど色々な選択肢がある中で、まず文化芸術というところに選択肢を入れ、その中でというところがあるので、仮に他のセグメントが非常に活況になってくると、割合の取り合いになりがちな状況もあるので、50 パーセントという目標設定が果たしてどうなのか、適切に定めるとよろしいんじゃないかなと思っている。

また、これもアンケート調査の立てつけによるが、文化、伝統という言葉から想像するところも多様なのではないか。我々の社内で調査すると、タイパ、コスパなんていう言葉が、特に若者の中では非常に価値が大きくなってきている。いかに手軽に臨めるかも重要な価値観になってきていて、これはもう見過ごせないものかなと思うと、個人でどこかの施設を借りて何か準備をして活動するということは腰が重いと感ずるのも事実かなとも思う。文化芸術は、ある種カジュアルに楽しめるものですよ、例えばいつもと違う県の地産のものを食べる、それも 1 つの文化活動ですよ。そういった伝え方も工夫の 1 つかなと、先述のアンケートと一緒に拝見して思った。

【委員】

施策の柱の 4 番で子供のことが書かれているが、やはりなるべく小さい頃から文化芸術に触れ合うことが良いと思う。県として、できれば義務教育で、学校で授業や活動の一環で体験することを地道に始めていただけたら嬉しい。自分で行きましようというのはなかなかできないので。

それからもう 1 つ、誰もがというお話で、我々観光の分野で、委員もおっしゃっていたが、やはり芸術って意外と広いので、今まではどこかに見に行くとか、何か作るとかやるとか。テレビも今は見る人が少なくなってきて、YouTube でどんどん探せる時代になってきている。そうすると、文化芸術の仕組みとか、価値観とか、そういうものが違ってきていて、先ほどのお話のように、電車の中では 1.5 倍速で動画を見るというのも、そのうち普通になっていくのかとか。

そういった中で、県としてこういう風にやっていきたいと思いますというのも大事だとは思いますが、県だけでなく、民間や NPO などと一緒にやっていかないとできなくなってくるのではないかという気がしている。これが来年度すぐ始めるのか、もしくはどこから始めるのかというのはなかなか難しいとは思いますが、もちろん県でイニシアチブを取っていただいて構わないと思うので、まずは色々な御意見を引き上げていくことが第 1 段階なのかなと思う。そういったところもお願いしたい。

【委員】

担い手の話で、佐原の大祭は夏と秋の年2回、1つの町の中で開催するので、夏と秋での曳き手の相互支援の部分と、周辺から来ていただくものと、周辺農村との関係性についてであるが、元々、佐原囃子の演者は周辺の農村の人たちをお願いしていて、それは佐原への集客戦略の1つでもあった。お祭りの時はその村をあげて見にきていただいて、地域振興に繋げるというような考え方があった。高齢化とともに、当然色々な地域でも担い手の不足は出ている。佐原もそうなので、関係性のある人たちに応援をしていただくとか、少し広がりを求めているというのが実態。

また、全国発酵食品サミット in 香取という発酵食品の全国大会が10月26、27日に佐原で行われる。「発酵と観光のまちづくり」というテーマで、サブテーマは「まちぐるみ発酵劇場」としている。発酵食品と合わせて伝統文化を1ヶ月間街中全体で楽しんでいただけるということを設定しており、「まちぐるみ小劇場」としてお祭りではないが山車を曳き回したり佐原囃子の演奏を行ったりもする。

佐原囃子の演奏は、大人だけではなく、小学生から中学生、高校生まで郷土芸能部で参加してもらい場面が多々あり、まちぐるみ小劇場の方も、1ヶ月間地域で行う中に、やはり小学生、中学生、高校生の部活動の発表の場を設定している。

特に合唱については、去年辺りからやっとならできるようになり、県の県民芸術劇場事業において千葉交響楽団の方と地元の中学生、高校生の合唱コラボをまた始められるようになった。それらを町中の色々な人たちを巻き込んで展開するという手法をとっている。

どうしても文化芸術の現場はその市町村の地域になるので、県と市町村の連携を密接に深めて進めていただけるといいかなと思う。

【座長】

面白いことやっている、こういう情報をどう発信したら県民に届くのかというところをぜひ考えていただければと思う。

【委員】

先ほどの委員と重複してしまうが、資料2-1の13ページ、令和5年度の進捗状況を一覧したページで、目標が増加を目指すというものもあれば、きっちりパーセンテージとして示しているものなど、項目によって違いが出てくるのはある意味当然だと考えているが、この目標値について、今回は次期計画のことが議題ではないが、委員の方々からもそういう話があった。

行政は目標に対する実績、この1点だけを捉えられてしまう部分がある。非常に行政として厳しいところが指摘されてしまう部分であるので、計画を作る段階で、50パーセント、70パーセントという、ある程度は妥当な目標値を作ったとは思いますが、

進捗状況としては毎年度 2 ポイントとか 3 ポイントぐらいしか増加せず、目標値に対して実績が乖離している状況なので、読めない部分を、当初から加味しないとか、そういった目標値の設定にすることが大切なのかなという感想を持った。

【委員】

子供若者のところでヒントになれば良いが、私は 1998 年から障害のある人もそうでない人も来られる造形教室を開いている。そこで子供たちに、10 歳までに 100 か所、美術館、博物館、音楽鑑賞等をしようということをいつも伝えており、実際に達成した子もいる。私自身も高 3 の子がいるが、1 年間に 5、6 か所行って 10 歳までに 150 か所ぐらい行った。コロナで少し止まったこともあるかもしれないが、そういうことを目標にして教室の子供たちには伝えているし、私自身が引率して美術館、博物館に行ったこともある。

子供たちは教室を卒業した後、美術の道、伝統工芸の道に進む子が 1 番多く、輪島に行ったり京都に行ったり沖縄に行ったりという形で担い手になっている子もいるし、全く違う分野に行ったとしても、インスタとかで繋がっていたりすると、コンサート行ってきました、歌舞伎行ってきました、能行ってきました、今度はこの展覧会行ってきました。なんて投稿して人生を謳歌しているなという子もいる。去年は千葉県立美術館で開催されたテオヤンセン展に学生を誘ってみたらハマって、千葉だけでなく静岡まで見に行った。そこで係の方に千葉で持った疑問を静岡に行って質問する、そういう子もいた。

やはり、文化芸術の鑑賞の場は将来を見つける場だったりもするし、教科書に載っている作品に出会える、様々な価値観に出会える場であったりもする。家庭への推進は、どんどんいきましょうという目標値を掲げることで、ご家族が楽しめると同時に、学校への来訪もあって良いのではないかと思う。

専科非常勤で小学校に入っているが、先生方にも、美術館、博物館に行ったことがない方もいる。先生たちも知りたい気持ちはあると思うが、仕事が忙しいことなどから、行けない。御家庭もやはりなかなか忙しいので行けない。そういったことから、学校でまとめて、みんなで行って、学んで、体験の場も設けていただけると良いかなと思うが、そういう場に、博物館、美術館、劇場がなっていくと良いとも思っている。若者たち、子供たちを引き入れるヒントにしていれば。

【座長】

具体的に 100 か所という目標を設定するのは、面白い方法かもしれない。中には経済的な問題や、身体的な課題等でそこまでアクティブに行動できない方もいらっしゃるのだから、配慮は必要ではあるが、そういう目標感を示していくというのは、強制ではないが文化芸術に触れる機会を作っていく 1 つのやり方にはなるだろうと思った。

本日議論した令和 5 年度の進捗状況を踏まえて、6 年度どうするかというのが次の

議論になっていくと思うので、ぜひ今日の議論を少しずつ覚えていただき、それを次の施策の柱にどう活かしていくのかということを繋いでいただければと思う。

【事務局】

長時間にわたり貴重な御意見をいただいた。いただいた御意見の中でキーワードがいくつかあったと思うが、子供の頃から文化芸術に親しむ方策や、あるいは伝統芸能に対する認識、敷居をもっと近づけるような表現方法、あるいは地域性、町内会的なものもあるんじゃないとか、色々と知見をいただいた。

アンケートについても、もっと活用して、分析して施策に活かして欲しいといった御指摘をいただいたと認識している。その辺も踏まえながら次回に向けて整理をしていきたい。